

P-295 子宮内膜の腺腫性増殖症と異型増殖症に対するMPA療法および子宮鏡下内膜部分切除術に関する検討

琉球大

伊波 忠, 正本 仁, 稲福 薫, 東 政弘,  
金澤浩二

〔目的〕子宮内膜の腺腫性増殖症(AdH)および異型増殖症(AiH)にはMPA療法が推奨されているが、MPAに反応しない例は子宮摘出術が考慮される。我々はこれらの症例に子宮鏡下の経頸管的切除術(TCR)を試みており、その有用性を検討した。

〔方法〕'84~'94にAdH 15例, AiH 7例にMPA療法またはTCRを行った。AdHにはMPAを15~30mg/日, AiHには40~200mg/日を3~6ヶ月間投与した。1~3ヶ月毎に硬性子宮鏡で病巣を評価し、狙い生検、または全面搔爬により管理した。TCRは術前にラミナリア桿を挿入して頸管の拡張と軟化を図り、レゼクトスコープを用いて病巣部の子宮内膜を表層筋層を含めて切除した。手術は超音波断層法による監視下に行った。〔成績〕①MPA治療でAdH 14例中12例(86%)では病変が消失したが、そのうち1例が3年後に体癌となり、子宮摘出術を受けた。MPA療法に反応しなかった2例とポリープ状病変で切除を繰り返された1例(観察期間はそれぞれ3年11ヶ月, 4年1ヶ月, 4年8ヶ月)ではTCRを行った後にAdHは消失した。②MPA治療でAiH 6例の病変は消失した。AdHの1例は繰り返しポリープの切除がされ、5年0ヶ月でAiHと診断された。TCRを受けた後は病変が消失した。③TCRを受けた4例の年齢は50才, 67才, 50才, 66才で、TCR後4ヶ月から2年10ヶ月経過して再発はない。手術時の合併症はなく、4例とも術後の子宮腔内の癒着はなく子宮鏡による観察は可能であった。④AdHの2例とAiHの1例がMPA療法後に分娩し、健児を得た。

〔結論〕①AdH, AiHに対するMPA療法は有効であったが、体癌に進行した1例を経験しており、厳重な管理が必要である。②本症に対するTCRは有効な治療法であることが示唆された。

P-296 婦人科癌患者の家族歴 — 性比変化と担癌の関連 —

国立がんセ・中央

園田隆彦, 近江和夫, 恒松隆一郎, 種村健二郎,  
山田拓郎, 池田俊一

〔目的〕婦人科癌の家族歴を分析し、担癌の妊娠、分娩児の性比に及ぼす影響を考察する。〔方法〕当院における治療例の中、一般に遺伝の関与があると推測されている子宮体癌200例、卵巣癌35例、及び乳癌103例、また比較対照疾患として子宮頸癌120例につき、婚姻・妊娠状況、分娩児の性別、四親等に至る家族歴を面接調査、癌の集積に関し分析する。〔成績〕1) 児の性比(父, 母, 発端者=患者を除外する)体癌では父に兄弟が多い。乳癌では父には兄弟が多く、母には姉妹が多く、自身にも姉妹が多い。卵巣癌では自身に兄弟が多く、自分に女兒が多い。2) 平均の児の数(父, 母, 発端者=患者を除外する)平均して父方の祖母に3.1~3.8人(父の同胞), 母方の祖母に3.3~4.0人(母の同胞), 母に2.9~4.0人(患者の同胞)の児がある。しかし患者自身の児数は一転して少なく、体癌1.9, 乳癌1.5, 卵巣癌1.5人となる。頸癌でも2.4人で幾分少ないが、人工流産率が高い。3) 癌の家系内集積 体癌では母と自分の兄弟に癌が多い。乳癌では父方の祖母, おば, 父, 母方の祖父, 祖母, 母に癌が多い。卵巣癌では父方の祖父, 母方の祖母, 父の兄弟, 母の姉妹, 父, 母, 自分の姉妹に癌が多い。患者の重複癌は特に卵巣癌に多い。4) 患者の妊娠状況 不妊率は体癌21.1%, 乳癌9.7%, 卵巣癌18.8%, 頸癌5.0%であり、未婚率は体癌3.0%, 乳癌12.6%, 卵巣癌8.5%だが頸癌では0.8%に過ぎない。〔結論〕体癌, 乳癌, 卵巣癌の家系内各同胞には有意の性比の変動が見られ、癌集積状況にも頸癌に比して差が見られる。以上性比, 分娩児数及び不妊率に関連した癌集積状況は、性染色体を含む遺伝荷重(発癌一致死遺伝子)を仮定すれば一つの説明が可能であり、原爆被爆者の発癌とその児の性比の変化と対比して興味深い。